

今回の課題絵本 Hat Cat は、おじいさんとネコの交流を描いた本です。おじいさんは一人で暮らしています。lived alone とありますが、きれいに整えられた部屋には温かみがあり、窓からはリスがのぞいています。家の裏には、庭に面した deck もあり、そのベンチにのんびりとすわるのがおじいさんの日課。帽子の上のにのせたピーナッツを食べに、リスたちが集まってきます。

ある日、ベンチに置いた帽子の下にネコが！おじいさんは、Hat と名付けてかわいがる。Hat が新聞をびりびりにしても、おそろいのカップからピチャピチャ飲んでも叱らないおじいさんですが (He let Hat do whatever he liked)、ただひとつ、禁止してることがありました。家の外へ出ることです。おじいさんは、Hat がリスに悪さをした、そのまま帰ってこなかったりするのではないかと心配なのです。

ところが、ある日、いつものように出かけたおじいさんは、帰ってきませんでした。次の日も、その次の日も、そのまた次の日も……。ここから、視点が Hat のほうに移ります。そして、おじいさんがいなくなって数日後、家に Other people がきて、Hat の世話をしてくれます。でも、おじいさんはどうしたのでしょうか？ Hat はまたおじいさんと会えるのでしょうか……？

Hat といっしょに不安と心細さでドキドキしながら読み進めれば、最後、Hat がおじいさんと再会できたところで、読者は Hat といっしょに心から幸せを感じることができるでしょう。また、前半部分がすべて、後半部分の伏線にもなっているので、そこも、読者に楽しんでもらわなければなりません。おじいさんがなぜ帰ってこなかったのか、Other people とはどういう人たちなのか、物語に書かれていないところもある程度想像しないと、訳せません。Almost や or worse といった、たった一語、二語に含まれている意味にも、想像力を働かせる必要があります。そんな意味でも、翻訳の力を試すのに、とてもいいテキストだったのではないのでしょうか。

では、具体的な審査のポイントをお伝えします。まず、一次審査では、全般的なこととして、

- ・誤訳はないか
- ・読みやすい文章になっているか（ちゃんと日本語になっているか）
- ・誤字脱字はないか
- ・原文にない勝手な補足（不必要な付け足し）がされていないか
- ・訳しもれはないか（「said ○○」の省略など、意図的な工夫は OK）
- ・誤った日本語が使用されていないか
- ・訳文が絵に合っているか
- ・不必要・不自然と思われる極端な幼児語が使われていないか
- ・創作になっていないか
- ・絵本にふさわしい言葉・漢字が使用されているか（対象年齢が意識されているか）

などを審査しました。

また今回の絵本全体では、

\*繰り返し

上にも書いたとおり、同じ単語や文を使った繰り返し表現が多く、それが伏線にもなっているのので、訳を統一する、あるいは少し変化をつけつつ訳をそろえることで、心地よい繰り返しになるようにする。

\*視点

原文は三人称ですが、おじいさん側に寄り添った文章もあれば Hat 側に寄り添った文章もあるので、訳文の視点が不自然にふらつかないようにする。

といったことを重視しました。

次に各ページのチェックポイントをいくつか、ご紹介します。

P.02

The old man lived alone. リスと楽しく過ごしているおじいさんの描写から始まるので、「alone」を「ひとりさみしく」とするなど、孤独を強調しすぎないように気をつける。

P.26 では主語を変えて「Hat lived alone」となっているので、そことうまくそろえられればベター。

P.03

「still and welcoming」と「grand old」のニュアンスをうまく表せているか。

「still and welcoming」が木を修飾してもおじいさんを修飾してもおかしくない訳になるよう工夫すること。

P.05

he found someone special P.27にも同じ表現があるので、なるべく訳をそろえ、なおかつ違和感のない日本語にする。「someone special」は、ここではネコ、P.27ではおじいさんを指しているが、原文同様、誰のことかはっきり書かずに、読者に絵を見て理解させられればベター。

P.07

food, rubs, talk この3つとも名詞で、かつ gave の目的語であることを理解できているか（ただし必ずしも名詞として訳さなくてよい）。不自然な日本語にならないよう注意

する。

- ・同じ単語がこのあと繰り返し出てくるので、なるべく訳をそろえる。
- ・この3つを与えているのは、ここではおじいさんだが、P.27ではネコで、立場が逆転しているので、それを意識した訳文にすること。

P.08

Almost. 「Hat にやりたいことをなんでもやらせていたが、ぜんぶというわけではなかった」というニュアンスであることを読み取った上で「Almost.」のひとことを訳せているか。前後のつながりがおかしくならないように、また絵との兼ね合いも考えながら訳す。P.20に同じ使い方の「Almost.」があることも意識する。

P.09

「or worse」が「あるいは（リスを追いかけるより）もっと悪いことが起きるかもしれない」というニュアンスであることを読み取れているか。

P.10

– or the squirrels 「or I couldn't bear to lose the squirrels」という意味であることを理解できているか。ダーシのあとに付け足してあるので、できれば訳文も付け足しになっているとベター。

P.13

Every day ここからの2ページに「Every day」が3回、「Every time」も合わせると4回出てくる。心配のあまり Hat を外に出さないというおじいさんの行動が来る日も来る日も繰り返されたことが伝わるように訳す。

the old man gave Hat his food. And rubs. And talk. food、rubs、talk がほかのところでも繰り返されていることに注意。

P.15

the old man didn't give Hat his food or rubs or talk おじいさんが意図的に food、rubs、talk を Hat にあげなかったと読める訳にならないように気をつける。また、ここからおじいさんの姿が消え、Hat 側に寄り添った文章になっていることも意識する。

P.19

Other people 絵に登場したふたりを指していること、おじいさんではないという意味の「Other」であることを理解できているか。このふたりが誰か（おじいさんの家族か、ヘルパーの親子か、など）は原文に書かれていないので、勝手な創作をしないように気をつける。

P. 20

Almost. おじいさんがいた頃と同じだけれど、まったく同じではない、というニュアンスを読み取れているか。P. 08 の「Almost.」の使い方と同じであることにも注意。\*ここは後述します。

P. 23

Would he leave? Would he chase the squirrels? 「Did」ではなく「Would」であることに注意。

P. 25

No. He would not. 「did not」ではなく「would not」であることに注意。P. 23-24 の疑問文の答えがこの P. 25 なので、つながりがおかしくならないように気をつける。

P. 27

when Hat went to greet the people 「the people」が P. 19 で登場した「Other people」であることを理解できているか。ここでは「the」がついていて、Hat にとって既に知っている人になっている点にも注意。

Hat gave him kitty food and kitty rubs and kitty talk. food、rubs、talk および kitty の繰り返し表現に注意。ここでは Hat が主語になり、P. 07 のときとは立場が逆転していることにも気をつける。

P. 29

the old man knew it. これまで何度も繰り返された「knew it」で終わることに注意。

一次審査では、プロの翻訳者の目線から、訳文を表面的に判断せず、「なぜその文にしたか」ということまで考えて審査しています。

結果、822 応募作品（参加受付件数は1027）中、27 作品が最終選考に進みました。

27 作品は、一次審査に挙げたポイントはすでにクリアしている訳が多いのですが、よりち密に見ることを心掛けました。それに加えて、二次審査では、全体を通して物語が流れ、一冊の作品として成立しているかどうか注目して審査しました。

最優秀翻訳大賞の『おじいさんとこねこ』（E-0395）は、原文をととても大切にした訳でした。といっても、そのまま英語を日本語にしたという意味ではありません。英語で書かれている「こと」を日本語にするには、英語で書かれている「こと」は何なのか、深く理解する必要があります。

live alone も「ひとりぼっちで」「たったひとりで」という訳が多かったなか、シンプルに「ひとりでくらしていました」と訳されています。そのあとの、as still and welcoming as a grand old tree。こちらは、苦戦されている方が多いなか、「おおきな木のように、ゆったりになにこ、みんなをむかえます」となっています。old tree を「古い木」と訳されている方が多かったのですが、この場合の old は古いというよりも年を取っているということだと思います。おじいさんの形容（比喩）として使われているわけですし、小さくも細くもない「おおきな木」ということで、じゅうぶん伝わるのではないのでしょうか。still=ゆったり、welcoming=になにこ～むかえる、もシンプルなのに、きちんとニュアンスを訳していると思いました。

ねこの名前は「ポーシ」。これなら、ハットが帽子という意味だと知らない若い読者にも、名前の由来が伝わりますね。

今回、わたし自身が一番考えたのは、Almost の訳し方でした。8 ページと 20 ページに出てきますが、20 ページの「It was the same as always.」の「It」とそのあとの「Almost.」の解釈が、訳者の方によって分かれていたからです。“ほとんど同じだけど、変わったことがある”ということですが、その変わったこととはなにか？ これを「おじいさんがいないこと」と解釈して訳したものと、「(8 ページと同様) ドアを開けっ放しにする日があること」と解釈して訳したものがありました。

実際に、英語を母語とする読者が読んだときも、解釈が分かれるのだと思います（もしくは、両方を読み取るか）。そんなとき、訳者として目指したいのは、「(なるべく) 原書が読まれている“読み心地”で、訳文も読まれること」ではないのでしょうか【注：もちろん翻訳とはなにかという問題、異文化圏のテキストを読むことの意味、などいろいろな問題が関わってきますので、あくまで”基本“として理解していただければ】。とすると、日本語版でも、読者の解釈の余地を残した訳文にするのが、この場合は「誠実な」翻訳なのではと考えました。

以上を踏まえた上で、さらに（当然）意味が通らなければなりませんし、almost という短い言葉を、日本語でも短く、なおかつ、原文同様付け足しのようなニュアンスを保ちつつ、訳さなければなりません。

最優秀翻訳大賞の方の翻訳は、「ほとんどは」。とてもシンプルですが、ちゃんと付け足し感もあって余韻が残ります。「おじいさんは、ポーシのすきなようにさせてやりました／ほとんどは」「おじいさんでないひとが、やってきました／ポーシにごはんをくれて、なでてくれて、はなしかけてくれました（中略）いつもとおなじでした／ほとんどは」。

ちなみに、特別翻訳賞の方はそれぞれ、「ほとんどはね」（『ねこの ハット』E-0462）、「ひとつのことをのぞいては」（『ぼうしねこ』E-0537）、「そう ほとんどは」（『ねこの ハット』E-0652）と訳してらっしゃいます。ここだけでお伝えするのは難しいのですが、今回みなさんの訳文を読んで、前後の訳文、さらにそのページの絵と、すべて合わせてはじめて良い訳文が生まれるのだと、改めて実感しました。

また or worse の訳も、シンプルに「りすをおいかけたり……もっとわるいことがおこるかもしれません」。こう訳しておけば、24 ページも、「もっとわるいことがおこるのでしょうか？」と、繰り返したと伝わる訳にすることができます。ここも、繰り返しが不

自然になっていたり、「わるいこと」が、Hat がリスに対して、もしくはほかの動物などに対して、することに限定されてしまう訳が多かったので、最優秀翻訳大賞の方のきれいに収まっている訳が目を引きました。

最後の「そしてそのことを……」でページをめくり、「おじいさんもわかっていました」という終わり方もいいですね。

優秀翻訳賞の『ねこのハット』(E-0044)では、went to grab his hat を「ぼうしをかぶろうとして」と訳したり、I just can't take the chance を「あぶない はしは わたれない」と訳すなど、こなれた訳文が光っていました。いちばん特徴的だったのは、またもや Almost。これを「でもね」と訳しています。「おじいさんは なんでも ハットのすきなように させました。 /でもね/ 『おまえを そとに だしたら……』 「いつも おなじでした /でもね」。こう訳されたら、「でも」のあとになにが続くのか、読者が想像せざるを得ません。こんなふうに余韻を出す方法もあるのだと、とても面白く読みました。

特別翻訳賞の『ねこの ハット』(E-0462)では、たくさんの方が悩まれていた someone special を「とつても すてきな ともだち」と訳していました。27ページでおじいさんが帰ってくるときは、「とつても だいすきな ともだち」と、繰り返しを生かしつつ、「だいすき」だけ入れ替えることで、おじいさんとネコの過ごしてきた年月を感じさせます。これなら、“とくべつなもの”とか、(おじいさんが帰ってくるところで)“すてきなひと”と訳すと生まれてしまう小さな違和感がなく、読むことができます。

最初に指摘した「ひとりぼっち」という訳、あと、10ページの「おまえが いなくなるなんて たえられない——りすたちだって おなじだよ」が、「りすたちだって、ハットがいなくなるのを耐えられない」という誤読を誘ってしまうかもしれないという点などが、少し気になりました。

同じく特別翻訳賞の『ぼうしねこ』(E-0537)。まずタイトルがかわいいですよ【注：タイトルは審査対象ではありません】。出だしの「そのおじいさんは」のように、絵を意識した訳がとてもよかったです。また、7ページで「おじいさんは まいにち、ボウシに ネコのごはんをあげて、ネコのナデナデをして、ネコのおしゃべりをしました」と訳しているのですが、そうすると、27ページで、「ボウシはおじいさんに」のあとまったく同じくりかえしを使えます。

小さなことですが、「べつの にんげんたち」という「別」という把握や、「いいえ /ボウシは なにも しませんでした」の「なにもしなかった」という訳は、もう少し工夫できるかと思いました。He would not は「なにもしなかった」のではなく、「そういうことはしない」「そういうことは起こらない」というニュアンスなので。

三人目の特別翻訳賞の『ねこのハット』(E-0652)。帽子を「ハットぼう(帽)」と訳しておいて、ネコの名前を「ハット」とするなど、細かなところまで考えて丁寧に翻訳し

ていることが伝わってきます。still and welcoming を、「じーっと うごかず さあど  
うぞ」といったようすで すわります」もいいですね。

例えば or the squirrels も「ーもちろん リスたちが いなくなってもね」と訳  
されていて、確かにここで省略されているのは、「or I couldn't bear to lose the  
squirrels」ですから、とても丁寧な訳なのですが、少々長く、原文のリズムとのずれを  
感じました。「ハットは おじいさんに だいすきな ねずみのおもちゃを もってきた  
り」のところも、もっと絵に頼ってしまってもいいかもしれませんね。

今回は、ちょっとしたニュアンスを大切に訳することの難しさを感じました。それは、  
その語や文章をうまく訳すだけでは達成できず、前後のつながり（流れ）やイラストす  
べてを含めてはじめて達成できることです。どこでページをめくるのかとか、原文の文  
章の長さ（短さ）とリズムなども、大切です。絵本の翻訳は、つくづく難しいと思いま  
す。

だからこそ、翻訳の醍醐味を味わえるのかもしれませんが。これからもどうぞ、みなさ  
ま挑戦してみてください！

英語部門 審査員 三辺律子